



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	技術・家庭科に対する意識調査とその履習方法等の改善について
Author(s)	崎浜, 秀栄; 比嘉, 善一; 新田, 保秀
Citation	琉球大学教育学部紀要 第二部, 22: 95-103
Issue Date	1978-12
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/931
Rights	

技術・家庭科に対する意識調査と その履習方法等の改善について

崎浜秀栄 比嘉善一 新田保秀

A Survey of Opinions Related to Industrial Arts-Homemaking Curriculum and Some Suggestions for Revising Requirements for the Same Curriculum Reflecting the Expressed Needs.

Shuei SAKIHAMA* Zenichi HIGA* Yasuhide ARATA*

(Received July 10, 1978)

I 調査の目的

大人になると男女の仕事の内容が異なり、男子は、おもに社会に出て働らき、女子は、おもに家事にたずさわることが多いという現実があり、男女の特性、興味や関心の相違、心身の発達、将来のおもな役割などを考えると、男子は男子向き、女子は女子向きの内容を深く学習させた方がよいとする意見がある。改訂前の文部省中学校指導書技術・家庭科編には『生徒の趣味や必要ならびに現在および将来の生活活動の相違などを考慮して「男子向き」と「女子向き」の二つの学習系列が設けられている』と述べられている。

これに対して、中学校技術・家庭科は義務教育の一般教育でありながら、男女で学習する内容が異なり、男女別々のクラスで学習が行なわれている。男女平等や男女共学を規定している憲法や教育基本法¹⁾の精神に反するのではないかと、とか、大人になっても男女が同じ仕事につくことが多くなってきている。共働きの家庭では、男子が家事をしたり、家内工業や農家・商家などでは主婦も家事以外の労働に従事している。これからすると、男子が家庭科の、女子が技術の基礎的なことを学習できない現在のあり方は不都合であるというような批判がある。日教組中央教育課程検討委員会²⁾の中間報告は「もともと普通教育としての技術教育は、男女共学で行なわれるべきなのに、男子向きと称する技術的内容を男生徒のみに、女子向きと称する家庭的内容を女生徒のみに課し、普通義務教育のうちで男女差別を助長する唯一の教科となっている」と技術・家庭科のあり方を批判している。この度の教育課程の改訂によって男子向き、女子向きの別をやめ、それらの中から各学校が適切に領域を選択して指

導計画を立てることとなった。3ケ年の移行措置期間を経て、昭和56年度から実施されることになっている。履習領域の具体的な選択や指導計画の立案については、今後、検討を要することが多い。

このような問題をかかえている技術・家庭科について、この教科を履習中の中学生や過去にこの教科を履習した高校生および大学生がどのように考えているかについて、昭和51年7月に意識調査を行なったが、この結果について報告し、この教科の教育内容の決定、履習方法の改善、男女共修の可能性などについて幾つかの提案をしたい。

II 調査対象

調査の対象になったのは、沖縄本島の中南部の中学生・高校生および琉球大学教養部の学生である。質問紙により回答を得た。

中学生：1,877名（男子916名、女子961名）

都市地区997名（男子509名、女子488名）

町村地区880名（男子407名、女子473名）

高校生：966名（男子472名、女子494名）

普通高校643名（男子286名、女子357名）

職業高校323名（男子186名、女子137名）

大学生：教養部学生171名（男子106名、女子65名）

III 調査結果および考察

1. 中学校9教科に対する中学生の好き嫌いについて、技術・家庭科がどのような位置にあるか、またある教科が好きになったり、嫌いになったりする理由はどうか、について調査した。結果は図1の通りである。

① 男子では、保体、社会、技家が好きな教科で英語、音楽、国語が嫌いな教科となっている。女子では、音楽、美術が好きな教科で、理科、英語、数学が嫌いな教科となっていて、男女による好き、嫌いの差が明瞭に現われているようである。

* Tech. Edu. Coll. of Edu., Univ. of the Ryukyus.

② 本研究の一部は文部省・広島大学教育学部主催の昭和51年度教員養成大学・学部教官研究集会において発表された。

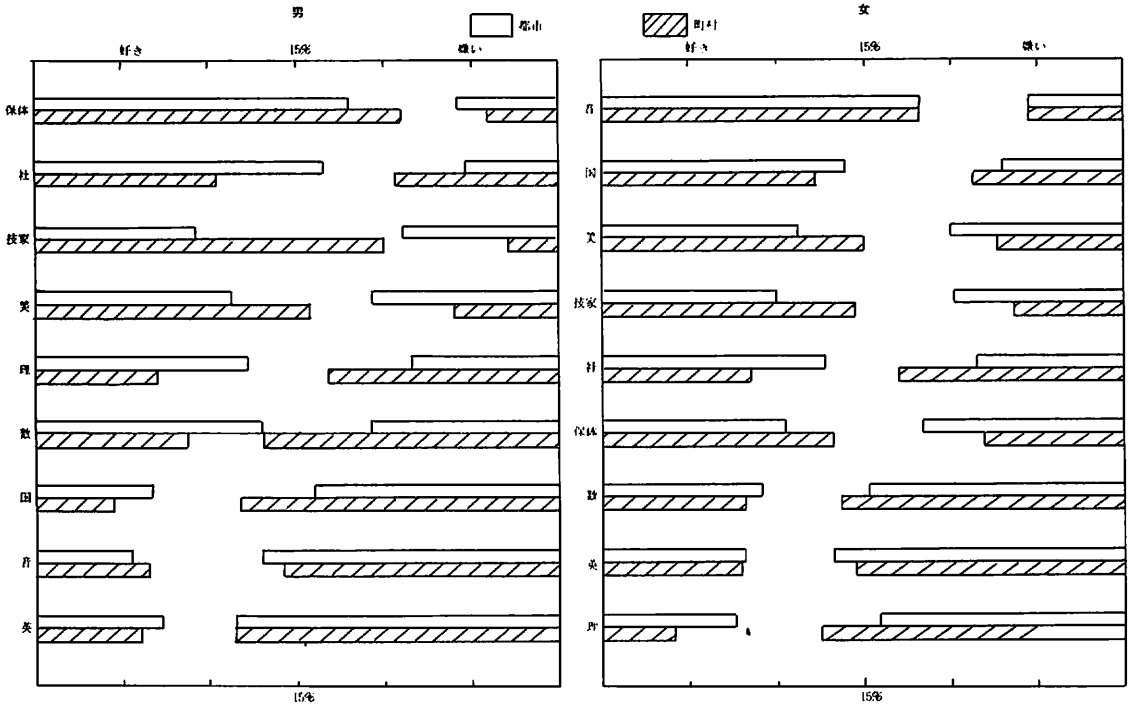


図1 好きな教科・きらいな教科

② 都市では、社会、保体が、町村では技家、保体、美術が好きで、嫌いな教科となっている。

③ 全体としては、保体、社会、技家が好きで、嫌いな教科となっており、英語、理科、数学が嫌いな教科となっている。

④ 教科の好きになる理由については、図2の通り、「内容が面白い」とか「授業がわかりやすい」ということが、おもな理由となっている。嫌いな理由としては、図3の通り、「授業がわかりにくい」、「内容が面白くない」がおもな理由となっている。また、「教科の成績が悪いから」というのが第3の理由となっている。

各教科が好きで、授業が楽しいということは、学校生活が楽しくなることにつながり、これが児童生徒の学力低下や落ちこぼれ、非行化をくい止める重要な「鍵」であると思われる。このためには、教科の精選構造化を図り、基本的で重要な事項には、十分に時間をかけて指導

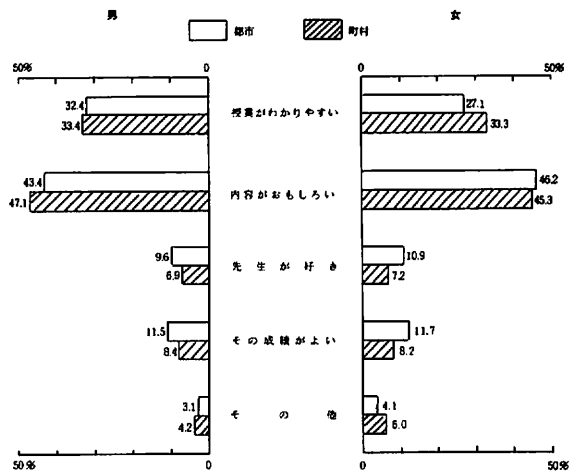


図2 教科の好きな理由

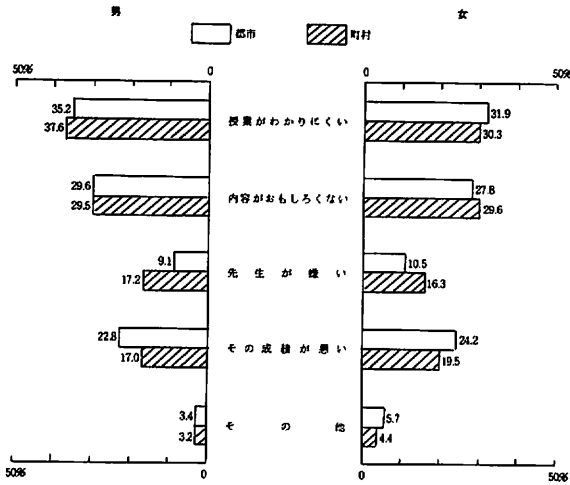


図3 教科の嫌いな理由

ができるようにし、教師が、生徒に分る授業をすることが大事であると思われる。

2. 技術・家庭の好き嫌いについての調査結果は、図4の通りである。

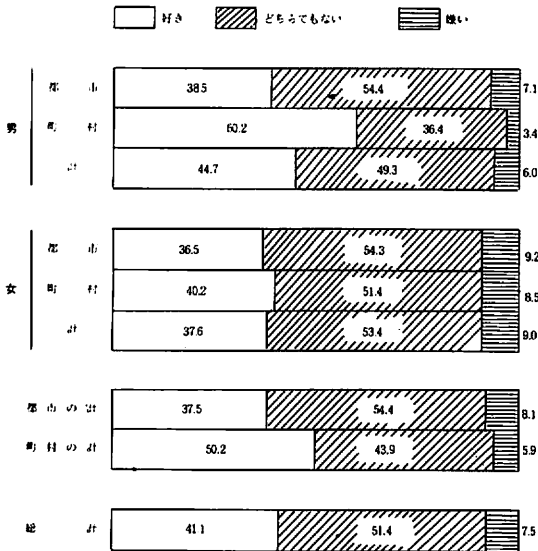


図4 技術・家庭科の好き、嫌い

① 統計でみると、「好きでもない嫌いでもない」というのが多く、「好き」が、これに次ぎ、「嫌い」と答えた者は少ない。「好き」と答えた者は、男子に多く、「嫌い」と答えた者は、女子に多くなっている。また、都市、町村別にみると、「好き」は町村に多く、「嫌い」は都市に多い。

② 好きな理由については、図5の通りで、「実習が

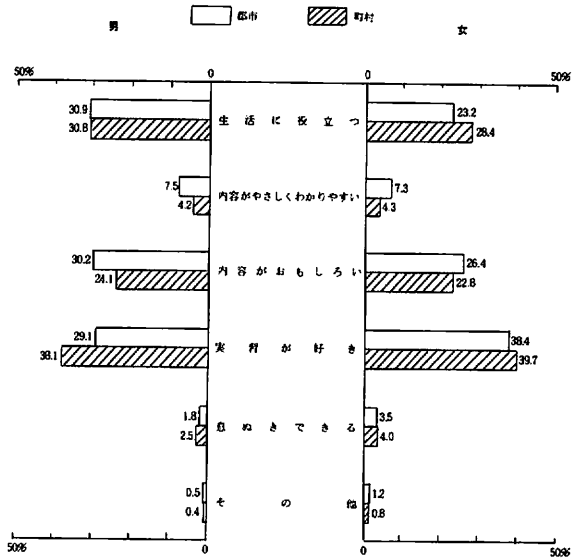


図5 技術・家庭科の好きな理由

好き」が第1位で、男女、都市、町村の別なく多くなっている。「生活に役立つ」、「内容がおもしろい」がこれについている。「生活に役立つ」ので技術・家庭科が好きと答えているのは、女子より男子に多い。

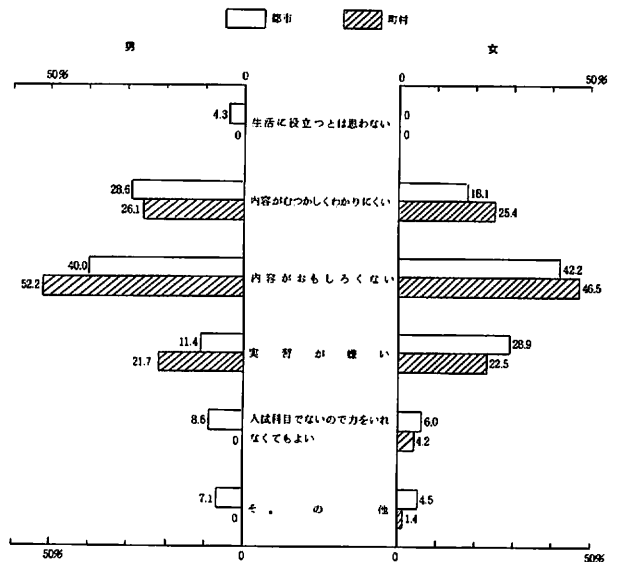


図6 技術・家庭科の嫌いな理由

③ 嫌いな理由については、図6の通りで、「内容が面白くない」、「内容がむづかしくわかりにくい」の順になっている。また、数は少ないけれども、「実習する

ことが嫌い」で、技術・家庭科が嫌いと答えているものもいる。

技術・家庭科を生徒の好きな教科にするには、他教科と同じく内容を精選して、魅力あるものにすること、生徒の実態に即して、生徒にわかる授業をすること。施設設備を一段と充実して、実験実習を中心として授業が展開できるようにすることである。

3. 技術・家庭科の全領域の中で、学習したいのはどの領域か、結果は図7の通りである。男子では、おもに男子向き（とくに電気、機械および木工）を、女子は、おもに女子向きの領域（とくに食物、被服および保育）を選んでおり、現状支持の傾向が強い。女子が栽培を5位に、男子が住居と食物を6位と7位に選んでいる。

科学技術時代に生活していくためには、女子にとっても、電気や機械の基礎について学習することは、きわめて大事であると思われるが、学習領域を自由に選択させると、これらを選択する女生徒は、きわめて少数であることがわかる。教育的見地から適切な履習の方法が講じられなければならない。

4. 技術・家庭科の学習内容の決定について、図8の(A)、(B)、(C)、(D)、(E)について、技術・家庭科を学習した経験のある高校生と大学生に回答させた。

① 高校生は、(B)「男子向き、女子向きがよい」と現状を支持しているが、大学生は、(A)「選択制がよい」と

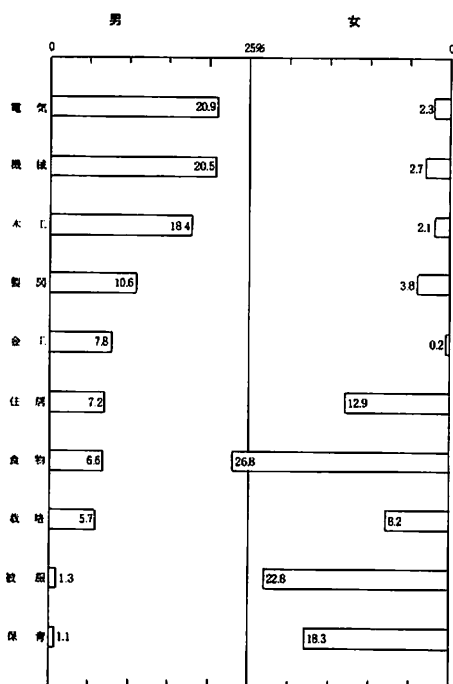


図7 学習したいと思う領域の順位

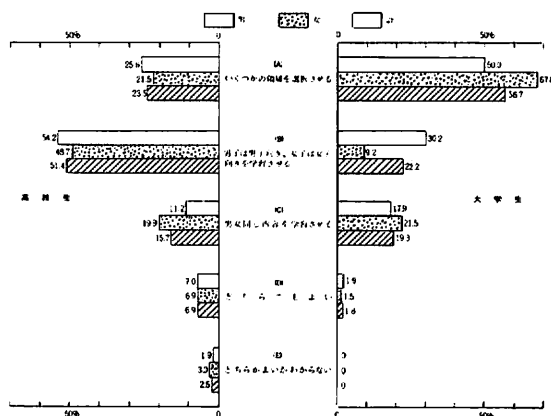


図8 技術・家庭科の学習内容の決定について

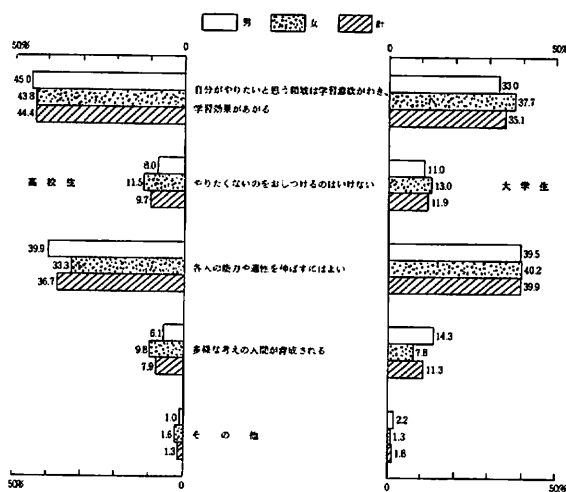


図9 選択制を支持する理由

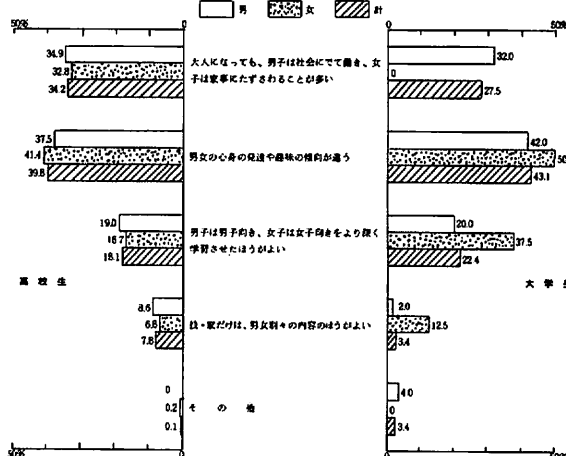


図10 男子向き、女子向きがよいとする理由

主張する者が多い。

② 選択制を支持する理由としては、図9の通り「自分がやりたいと思う領域は意欲がわき効果がある」がもっとも多く、「能力適性を伸ばすによい」が次に多くなっている。

③ 「男子向き、女子向きを学習させた方がよい」とする理由は、図10の通りで、高校生、大学生とも「男女の心身の発達や趣味の傾向が違う」がもっとも多く、「大人になると、男子は社会に出て働き、女子は家事にたずさわる……」の順となっている。これに対する女子大学生の支持者が0となっているのは、彼女達が、この考え方に強く反対していることの現われであろうか。

④ 「男女同じ内容を学習させた方がよい」とする理由としては、図11の通り、高校生、大学生とも、「大人になっても同じ仕事をする事が多くなっている」が最も多く、「男子が家庭の、女子が技術の基礎を学習できないのは具合がわるい」が次に多い。男子が家庭系の、

女子が技術系の領域を選択できるようになったのは、この度の改訂の特徴の一つであるが、如何に実行に移すかは、今後に残された問題である。

5. クラス編成の仕方について、(A)「男女同じクラスがよい」、(B)「男女別々のクラスがよい」、(C)「どちらでもよい」、(D)「どちらがよいかわからない」の4項について回答させた。結果は、図12の通りである。

① 中学生では、(B)「男女別クラスがよい」の現状支持が60.1%でもっとも多く、高校生では、「男女同クラス」と「男女別クラス」の支持者が相なかばしており、大学生では、逆に、「男女同クラス」の支持者が67.3%と、多くなっている。

② 「男女同クラス」支持の理由としては、図13の通り、中学生では、(イ)「男女いっしょが楽しい」が多く、次に(ロ)「教えあったり、助けあったり……」を挙げている。また高校、大学では、逆に、(ロ)が第1位で、(イ)が第2位になっており、とくに、女子にこの傾向が強い。

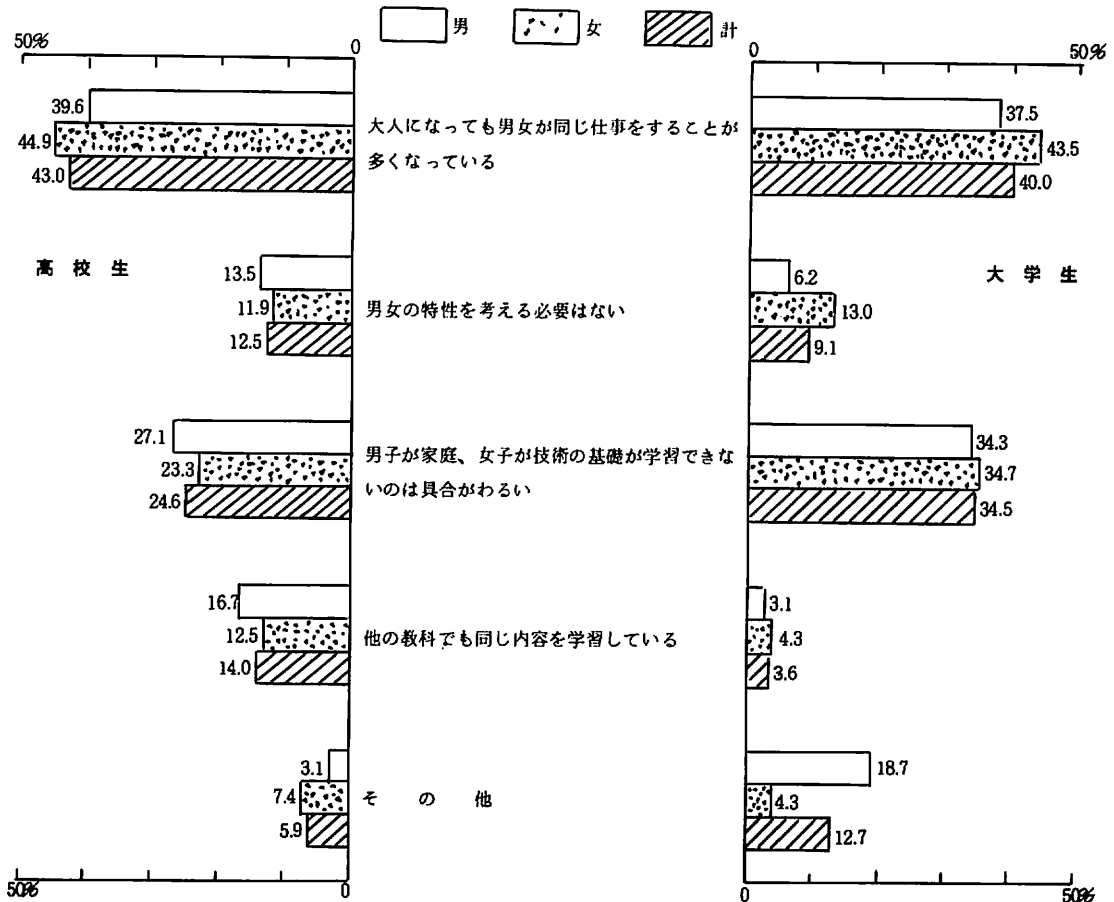


図11 男女同じ内容を学習させたほうがよいとする理由

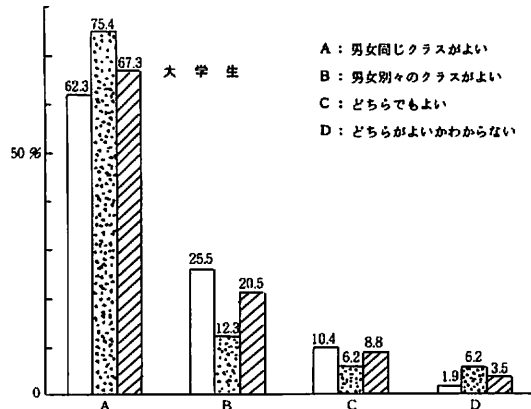
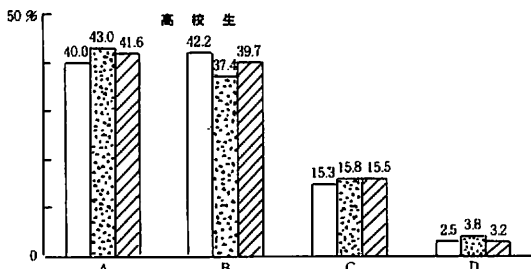
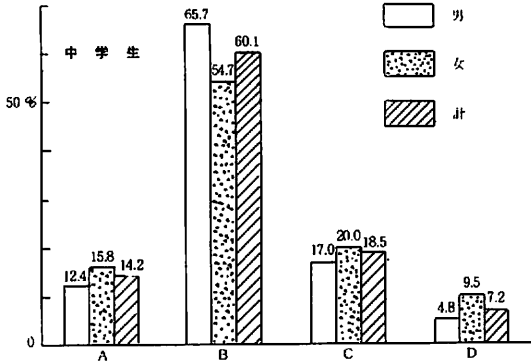
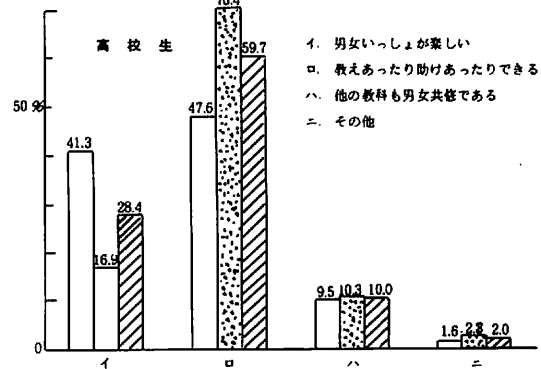
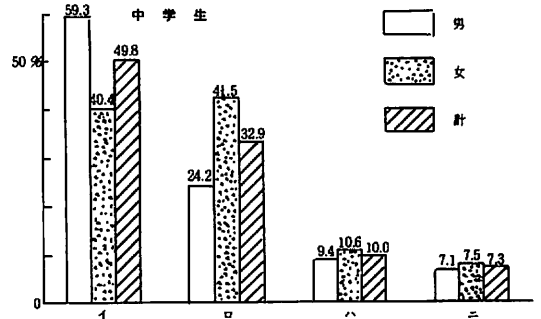


図12 クラス編成のしかたについて



- I. 男女いっしょが楽しい
- II. 教えあったり助けあったりできる
- III. 他の教科も男女共修である
- IV. その他

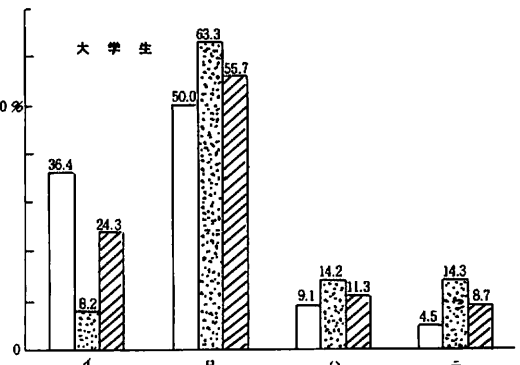


図13 男女同じクラスがよい理由

これは彼女達が、男子に対してとくに協力関係を強く望んでいる証拠であろうか。

③ (B)「男女別クラス」支持の理由としては、図14の通り、中・高校では、(I)「男女別々が気楽」がもっとも多い。これは、他の教科で男女共修であるために、男女

間で、絶えず気を使うことが多く、楽な気持ちで授業を受けることができないと感じている者が多いためであろうか。大学生では、第一の理由として、(II)「男子にも、女子にもできることしかやらないので、男女共修では内容の程度がさがる」を挙げている。

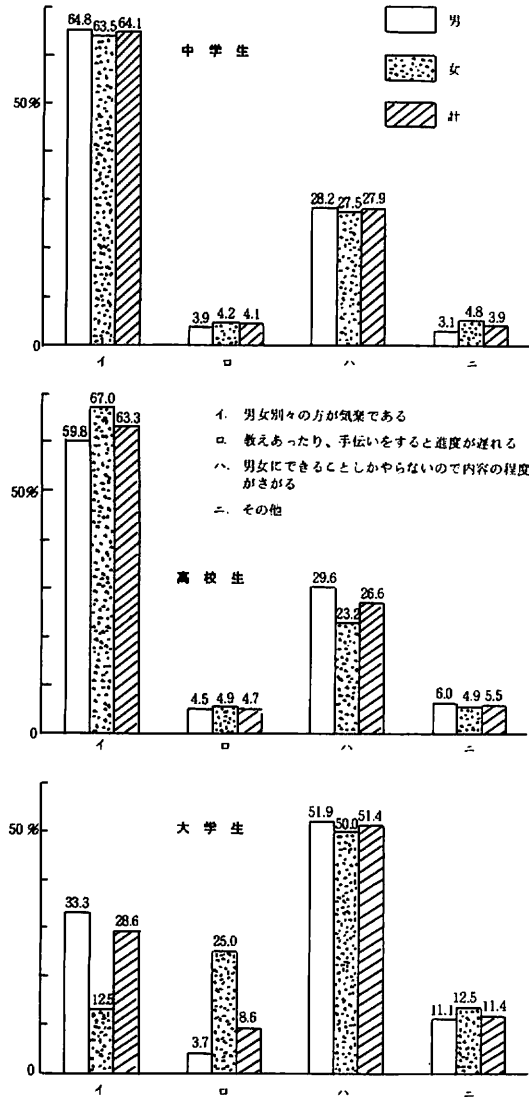


図14 男女別々のクラスがよい理由

IV 提 案

以上の結果を考慮に入れて、領域の選択、学年配置、指導時間数の配分、男女必修にすべきと思われる領域、クラス編成の仕方などについていくつかの提案をしたい。

1. 領域の選択、学年配置、指導時間数、領域の選択に

あたっては、地域や学校の実情（教員組織、学級数、実習室や備品の現状と効率的な利用の方法など）、生徒の実態（男女の特性、生徒の適性や能力、興味や関心など）、現在および将来の家庭や社会の要求などを考慮に入れて、具体的に決定されなければならない。また今回の改訂では、各小領域の標準学年が定められており、男子は技術系列から5領域以上、家庭系列から1領域以上、女子は家庭系列から5領域以上、技術系列から1領域以上を選択して、いずれも7領域以上を履習するようになっている。各領域の系統性や連続性、他教科との関連性を重視し、発展的に学習が展開できるように配置されなければならない。

例えば、改訂前の2学年の領域配置のように、1箇学年に多くの領域を、こまぎれに配し、生徒の学習を散漫にし、ある領域の学習が中断したりすることがないようにしなければならない。少ない時間で多くの領域を学習させ、どれも中途半端で不徹底に終わり、あるいは、いたずらに作業に追われて基礎的な知識や技能の習得さえもおろそかになり、時間の不足を嘆くことなどがないようにしたいものである。重要で基本的な事項を精選して取上げ、理論的にも実技の面でも十分に時間をかけて、ゆとりのある授業展開ができるようにしなければならない。精選された基礎的な事項に十分な時間をかけて、徹底した指導をすることが、多くのことを不徹底に指導するよりも、かえって、新しい問題に直面して、これを解決する力となる。いわゆる転位可能な技術の基礎として役立つものと思われる。

技術・家庭科をすでに履習したことがある高校生や大学生においては、すでに述べた通り、全領域を履習させるのではなく、「自分がやりたいと思う領域をやらせると学習意欲が沸き、学習効果があがる」と回答した者が多い。我が国の技術・家庭科の現状では、生徒の希望を如何に具体的に実施に取り入れるかは、今後に残された困難な問題である。例えば、アメリカのインダストリアルアーツなどの指導計画では、我が国の各領域が授業科目になっており、木工とか、電気とか、写真といったような科目が置かれている。生徒は自らの希望によって、各学期(1年2学期制が多いので約半ヶ年)、1科目づつを定められた科目数を履習する制度になっていることが多い。

2. 必修すべきと思われる領域

科学技術の時代に生活していくために、あるいは、台所の電化・機械化に伴って、女子が、電気や機械の基礎を身につけることは、きわめて必要なことであると思われる。しかし、領域の選択を生徒の自由意志にまかせると、これを選択する女生徒はきわめて少数である。

(図7参照)このような理由で、さきに、男女共通に必修すべきであると思われる内容を再編して、例えば、電気、機械の基礎とか、家庭一般のような領域を設け、男女共修にすることを提案したが、この度の改訂では、男子は家庭系列から1領域以上、女子は技術系列の中から1領域以上を履習しなければならないことになっている。例えば、電気1または、機械Iを女子に、食物1または住居を男子に必修にするなどの方法によって、教育的立場から、適切な方法が講じられなければならない。

3. クラス編成について

中学生では、おもに、「男女別クラスが気楽である」という理由で、男女別修を希望するものが多く、技術・家庭科をすでに履習したことがある大学生では、おもに、「教えあったり、助けあったりできる」という理由で、

「男女共修」を支持するのが多く、高校生では両者の意見が相なかばしていることは、すでに述べた。

一方、現場教師や教育委員会職員などを対象にした馬場・鈴木氏等の調査でも、「男女共学にふさわしい内容と男女別学にふさわしい内容の双方を学習させるべき」とする意見が73%に達する結果が出ている。

以上のような状況から考えて、男女に必修にすべきと思われる、例えば、食物1(あるいは住居)、電気1(あるいは機械1)などでは、男女共修とし、他の領域については、中学生多数の希望通り、別修にしてもよいのではないだろうか。

次に、男子が第1学年、第2学年で家庭系列を履習する場合の年間指導計画例として、例1、例2をかかげる。

例1. 第1学年で家庭系列を履習する場合

学期 学年	第1学期												第2学期												第3学期											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	
1	木材加工 I (25)												木材加工 II (20)												食物 I (25)											
2	金属加工 I (35)												機械 I (35)																							
3	機械 II (35)												電気 I (35)												電気 I (35)											

例2. 第2学年で家庭系列を履習する場合

学期 学年	第1学期												第2学期												第3学期											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	
1	木材加工 I (35)												金属加工 I (35)																							
2	金属加工 II (25)												住居 (25)												機械 I (25)											
3	機械 II (35)												電気 I (35)												電気 II (35)											

崎浜・比嘉・新田：技術・家庭科に対する意識調査とその履習方法等の改善について

最後に、この調査に協力して下さった現場の先生方に
厚く感謝を申し上げたい。

参 考 文 献

- (1) 文部省 技術・家庭科の性格 中学校指導書技術
・家庭編 P 2 昭和45年5月
- (2) 日教組中央教育課程検討委員会 教育課程改革試案
教育評論 5、6月号 P94 1976
- (3) 崎浜・比嘉・新田 技術・家庭科に対する意識調査
とその履習方法等の改善について 昭和51年度教員養
成大学・学部教官研究集会研究集録 P104～105
昭和51年
- (4) 馬場・鈴木・斎藤・菊地・吉沢・佐藤 技術教育に
関する意識調査の結果（第2報） 宇都宮大学教育学
部紀要第23号 P46 1973